

文学 〈六〉

# 文学史 寺山修司

今回の学習のポイント

「寺山修司」について知ろう！

国語監修・執筆

中澤 匠吾

寺山修司（てらやま しゅうじ）

昭和一〇年（1935）〜昭和五八年（1983）。青森出身。歌人。詩人。

ほかに、劇作家、演出家、映画監督、評論家、エッセイストなど、幅広いジャンルで才能を発揮し活躍した。

代表的な作品

詩歌句集『われに五月を』など

歌集 『空には本』『田園に死す』など

戯曲集 『血は立ったまま眠っている』など

## 経歴

中学時代に、当時級友であった京武久美（俳人）の影響を受け、俳句の世界に傾倒します。文芸部に所属し活動し、青森高等学校進学後も文学部で句作を続けました。昭和二九年（1954）、早稲田大学教育学部国文学科へ進学します。大学では短歌の創作を始め、歌人として活動します。早期から優れた才能を開花させますが、腎臓を患い、大学は在学一年足らずのうちに退学しました。

昭和三二年（1957）にはそれまでに作られた俳句、短歌、散文詩などを集めた第一作品集『われに五月を』が出版され、その翌年には第一歌集『空には本』が出版されます。また、戯曲（劇の上演のために書かれた文学作品）の創作、ラジオドラマや映画のシナリオを担当するなど、活動の幅を広げていきました。

以後も評論、脚本、演劇、映画の世界など、多彩な作品を手がけ活躍しますが、昭和五八年（1983）、敗血症により四十七歳という若さでこの世を去りました。

## 劇団「天井桟敷」

俳句、短歌を創作活動の原点としている寺山修司ですが、自身が主宰したアングラ演劇集団「天井桟敷」の活動が社会的には広く知られています。アングラ演劇とは、「アンダーグラウンド（地下）演劇」のことで、反体制・前衛的な演劇活動全般を言います。「天井桟敷」は昭和四二年（1967）に結成され、小劇場を活動の中心の場とし、既成の枠にとられない、反商業的、実験的公演、パフォーマンスがブームを呼び、海外公演なども行いました。

## 小沢さんが語る、寺山修司の魅力とは？

番組で寺山修司について語る、スピードワゴン・小沢一敬さんは、十代の多感な時期に寺山作品と出会い、考え方などにも影響を受けたということ。その魅力は、ひょうひょうとした「軽やかさ」にあると言います。作品の描写には、暗さ、深刻さ、重さといった、言わばネガティブな要素もあるわけですが、それらを直接的に読み手に押し付けてこないところに魅かれるポイントがあるようです。

### 『寺山修司少女詩集』

いくつかのテーマで書かれた自由詩、散文詩からなる作品で、少女の心や愛などについて、寺山独自の感性で表現されています。タイトルに「少女…」とあるため、どこかメルヘンチックなイメージを持たれるかもしれませんが、必ずしもそのような作品ではなく、透明感のあるもの、軽快、清涼、純粹な印象のものから、どこか猟奇的な印象をもつ作品なども含まれています。

番組で小沢さんが紹介する「海を見せる」は、この詩集の「海」をテーマにした作品の一つです。小沢さんが語るこの短編詩のストーリー、そこからどんなことを感じ取ったのかなどを確かめてみてください。

### おとめ

四十七年という短い人生を駆け抜けた寺山修司は、その唯一無二ともいえる作品、創作活動を通じて、時代に一石を投じインパクトを与え続けました。本業は何かと問われると「職業は寺山修司です」と答えていたというエピソードからも彼の多才ぶり、多様な活動をうかがい知ることができます。現代風には「マルクリエーター」とでも称するのですが、その言葉にも収まりきることのない、「比類なき表現者」であったと言えるかもしれません。

高校の国語の教科書ではしばしば彼の短歌が取り上げられていますが、「どんな人だったのだろう」「どんな作風なのだろう」と興味を持った方は、その作品を手にとってみてはいかがでしょうか。

